

2) 当科における家族性乳癌の検討

魚住 尚史・牧野 春彦
 佐野 宗明・佐々木 壽英
 田中 乙雄・梨本 篤
 土屋 嘉昭・薮崎 裕 (県立がんセンター)
 瀧井 康公 (外科)

【目的】 遺伝性に乳癌を高率に発生する家族がある。近年その原因遺伝子が明らかとなった。当科での家族性乳癌を検討した。【対象】 1991年から1998年までに当科を受診した家族性乳癌26人(近親者に2人以上乳癌患者のいるもの)を非家族性乳癌患者1106人を対照として背景因子を検討した。ただし近親者に一人も乳癌患者のいない者を非家族性乳癌とした。【結果】 家族性乳癌の発症平均年齢は47.3歳、若年発症は30.9%であり、発症年齢が有意に若かった。家族性乳癌では、両側乳癌の発生率は11%と高かった。両側乳癌の初発年齢、両側乳癌発生までの期間に差はなかった。ER, PgR 陽性率が低い傾向があったが有意差は認められなかった。核異型度は、Grade IIであることが多いが、高率にGrade V, IVであった。家族性乳癌家系から任意に選んだ14家系についてBRCA 遺伝子について検索したところ、50%、7家系にgerm line mutationを認めた。【結語】 乳癌ハイリスクグループを明らかにすることは、早期発見治療につながると考えられた。

3) Mucocele-like tumor の一例

本間 慶一・太田 玉紀 (県立がんセンター)
 根本 啓一 (病理)
 佐野 宗明・牧野 春彦 (同 外科)

【症例】 46才、女性。1994年8月から乳腺症で当院外科にてfollow中。ドックで右乳腺腫瘍を指摘され、1999年3月当院外科受診。右C領域に径2cm大の腫瘍を認め、ABCではClass V、粘液癌が推定されるも、USやMMGでは悪性所見なく、wide excisionとなった。組織学的には、粘液貯留嚢胞の破裂による粘液成分と上皮成分の間質への逸脱による病変で、Rosenが提唱したMucocele-like tumor (MLT)と判断したが、本例にはADHも伴っていた。【考案】 当初、MLTは良性病変と言われたが、ADHやDCISを伴う報告もあって、現在ではMLTと粘液癌とを一連の粘液産生性腫瘍と位置づける考えがある。今回、MLTと純型粘液癌20例の細胞像・組織像を比較したが、両者が混在した症例もあって、典型例を除き鑑別は困難であった。従って細胞診でMLTが推定される場合、良

性とは即断せず、probe lumpectomy等を行い、診断を確定する必要があると思われた。

4) 乳腺の血管肉腫の1例

植木 匡・小林 康雄
 杉本不二雄・斉藤 六温 (刈羽郡総合病院)
 関矢 忠愛 (外科)

【症例】 19才、女性。1997年の9月より左乳房に有痛性腫瘍を触知し1998年1月19日に当科初診した。来院時、左乳房A領域に表面平滑で円形の腫瘍を触知した。【検査所見】 血液検査では異常を認めず。超音波検査で1.32cm×0.68cmの内部低エコーの腫瘍を認めた。マンモグラフィーでは陰影を認めなかった。【経過】 1998年1月21日に局所麻酔で腫瘍切除術を施行した。切除時所見は乳腺嚢胞で周囲組織に褐色の部分があった。約5mmの同変色部位を病理検査に提出し乳腺血管肉腫の診断を得た。特殊染色で第8因子とCD31がいずれも陽性だった。以上より、1998年2月25日に乳房扇状切除の追加手術を施行し腋窩リンパ節の郭清は行わなかった。追加の切除標本では肉腫の遺残は認めなかった。局所切除後1年半経つが再発は認めていない。【まとめ】 乳腺血管肉腫は本邦での報告は26例と希な疾患であり、今回若干の文献的考察を加え報告する。

5) 乳房温存手術における乳房整容法

三浦 宏二 (がん検診クリニック三浦外科)
 川合 千尋 (消化器科・外科 川合クリニック)

乳房温存療法の大きな目的は美容であるが、広範囲に切除すると著明な変形をきたしてその目的が果たせないことも多い。我々はquadrantectomyを乳房温存手術の基本としているが、外側乳癌に対しては、切除後に胸背動静脈をstalkとする有茎広背筋弁を欠損部に充填して乳房の変形を予防してきたが、効果的な手技と考えられるので手技と成績を報告する。

まず患者を背臥位とし、腋窩から乳房下溝線にいたる皮膚切開を加えquadrantectomyとlevel-2までのリンパ節節郭清を行う。次に胸背動静脈をstalkとする有茎広背筋弁を採取し、これを欠損部に充填して整容を行う。

これまで同手術を施行した25症例の平均手術時間は78